ラテン語初歩

改訂版

田中利光著

岩波書店

改訂版はしがき

本書の旧版は，1990(平成2)年2月に発行された．以来10年余経過したわけである．その間，本書について経験したことをあれこれ勘案して，この度の新版では，次のような点を改訂した．

(1) 各課の和訳問題と羅訳問題を，お互い同士が90パーセント位の解答であるように作った．これによって一方では，ラテン文のおおよその意味の見当をつけ，正確な意味を捉える手がかりになり，また他方では，ラテン語訳をする場合のヒントになるだろう．そして問題点をはっきり押さえ，落ち着いて，そして自信をもって解答することができるようにした．

場合によっては90パーセント以上に，お互いの解答であるようにした．また和訳問題をかなり意訳して羅訳問題にした．そのような場合は，照らし合わせてお互い同士の解答であることを確認するだけでも十分練習になると思う．

それでもなお疑問に感じられるのではないかと予想される個所には丹念に註をつけた．また相互参照も念入りにして，復習，予習，まとめの便に資するようにした．

このように改訂したので，あたかも面倒なパズルを解くことを強いるような点は皆無になったのではないかと思う．

(2) 1題1題の問題の内容が相互にそれとなく関係があるようにしたので，内容がばらばらであった点が改善された．それができなかった場合も，各々の文がそれだけで暗唱に堪えるような，印象深い名句(あるいは迷句)を和訳の問題として，なるべく揃えるようにした．

(3) さらにまた，これも暗唱に堪えるような，印象深い文句(あるいは迷句)を30近く選び，訳と必要な場合は説明をつけて，ところどころに「引用句」として掲げた．これによって，単調さを避け，「アクセント」をつけることができたと思う．

(4) 旧版の「読み物」の中から「文例」として6つ選び，そこに新出する単語

は取り出して訳語をあらかじめ提示し，註を補充し，訳をつけ，終わりの方の課の中に分けて入れた．訳と原文を照らし合わせることで，これもよい練習になると思う．かなりこみいったラテン語に(敬遠されることなく)触れてもらえるようにした．

(5) 発音(アクセントを含めて)にも「解答」をつけた．

以上のような改訂によって，楽しく気軽に学べるラテン語学習帳という感じのものになったのではないか，また旧版につけていただいたコピー「手に取り，取りかかれば習得できる入門書」の歌い文句にも，また「ラテン語初歩」の書名にもより適ったものになったのではないかと希望している．

2002(平成14)年2月

初版はしがき

本書は，ラテン語の基礎的な事項を章ごとにすこしずつ取り上げて説明を加え，取り上げられた事項を練習したり，復習したりできるような若干の問題を配したものである．

羅文和訳の問題は，少しずつ積み重ねられていく既知の知識で容易にわかるものばかりである．あらかじめ説明しなかった事項が含まれている問題は，その点について註で説明しておいた．また新しい単語は，あらかじめ取り出して訳語を与えておいた．いろいろな理由によるものであろうが，あるいはいささか難しく感ぜられる問題も多少あるかもしれない．しかし学習に支障を来すようなことはないと思う．

和文羅訳の問題は，羅文和訳の問題を参照して，これも容易にできるものばかりである．敬遠しないで是非やってみてほしいと思う．新しい単語で必要なものは問題文の中に添えて与えられている．また和文羅訳に必要なすべての単語は巻末の語彙(和―羅)の個所に与えられている．なお語彙(和―羅)の個所のラテン語の単語については，長母音の上に，長母音であることを示す横線(cf. §3)を付していない．ラテン語を書く場合は，この横線を付けないで書くようにすることを勧めたい．

なお最後の章として，若干の短い読み物を添えた．これは多少(個所によっては相当)難しく感ぜられる所があるかもしれない．またそれまでの章で取り上げなかった，一寸込み入った事項も出てくる．しかしそれらの点についても一応の註を付けておいたので，充分読みこなしていただけるものと希望したい．

本書を作るに当っては，田中美知太郎，松平千秋著「ギリシア語入門　改訂版」(岩波書店)に，説明の要領，その他の点で教えられることがすこぶる多かった．また，松平千秋，国原吉之助著「新ラテン文法」(南江堂)から，練習問題文を借用した場合が少なくない．その他にもなにかと参考にさせていただいた．更にまた，いろいろな方々にいろいろなかたちで力を貸していただいた．特に，

中山恒夫氏，田中博明氏にお力添えをいただいた．ここに記して謝意を表する次第である．

1989年(平成元年)6月

目　次

改訂版はしがき …… v

初版はしがき …… vii

I 文字と発音 …… 1

II 音節とアクセント …… 4

III 動詞活用　現在直説法能動相　第一，第二活用 …… 6

IV 名詞活用　第一活用 …… 8

V 動詞　第三，第四，第五活用 …… 10

VI 名詞　第二活用(1) …… 12

VII 形容詞活用　第一，第二活用(1) …… 14

VIII 未完了過去直説法能動相 …… 17

IX 名詞　第二活用(2) …… 19

X 形容詞　第一，第二活用(2) …… 21

XI 未来直説法能動相 …… 24

XII 前置詞．所格．eō …… 26

XIII 不定詞(現在能動相)．sum, possum …… 29

XIV 名詞　第三活用(1)——i音幹名詞 …… 32

XV 形容詞　第三活用(1)——i音幹形容詞 …… 35

XVI 完了直説法能動相 …… 37

XVII 過去完了および未来完了直説法能動相 …… 40

XVIII 名詞　第三活用(2)——黙音幹名詞 …… 43

XIX 名詞　第三活用(3)——混合幹名詞 …… 46
XX 現在，未完了過去および未来の直説法受動相．不定詞(現在受動相) …… 48
XXI 名詞　第三活用(4)——流音幹名詞 …… 52
XXII 名詞　第三活用(5)——s音幹名詞 …… 54
XXIII 形容詞　第三活用(2)——混合幹形容詞と子音幹形容詞 …… 56
XXIV 完了，過去完了および未来完了の直説法受動相 …… 59
XXV 動詞の主要部分．volō, nōlō, mālō …… 62
XXVI 名詞　第四，第五活用 …… 65
XXVII 能相欠如動詞．fīō, ferō …… 68
XXVIII 指示代名詞および限定代名詞 …… 71
XXIX 疑問代名詞および不定代名詞 …… 75
XXX 現在，未完了過去の接続法能動および受動相．目的を示す副文における接続法 …… 78
XXXI 人称代名詞 …… 82
XXXII 所有形容詞および強意代名詞 ipse …… 84
XXXIII 完了，過去完了の接続法能動および受動相．間接疑問文における接続法 …… 86
XXXIV 条件文(1)——事実に反対の仮定をする …… 90
XXXV 条件文(2)——仮想の場合と予想の場合 …… 92
XXXVI 不定詞(1)——完了能動および受動相．対格不定詞節 …… 94
XXXVII 不定詞(2)——未来能動および受動相 …… 96
XXXVIII 関係代名詞 …… 98

XXXIX 非人称動詞 …… 100
XL 分詞(1)——現在能動相 …… 102
XLI 分詞(2)——完了受動相，未来能動相．状況を示す分詞 …… 104
XLII 奪格の独立的用法 …… 107
XLIII 形容詞の比較 …… 111
XLIV 形容詞の不規則な比較 …… 114
XLV 数　詞 …… 116
XLVI 動名詞(gerund) …… 121
XLVII 動形容詞(gerundive) …… 124
XLVIII 動名詞の代わりに用いられる動形容詞 …… 126
XLIX 命令法能動相 …… 129
L 能相欠如動詞の命令法．主文における接続法 …… 133
LI 目的分詞(supine) …… 136

活　用　表

I 名詞の活用 …… 145
II 形容詞の活用 …… 150
III 代名詞の活用 …… 154
IV 数　詞 …… 158
V 動詞の活用 …… 163

参考書目 …… 186
語彙 (羅——和) …… 189
(和——羅) …… 214
索　引 …… 225

あとがき ……229

I 文字と発音

§1. 文字およびその名称と発音は次のとおりである.

大文字	小文字	名称	発音
A	a	ā	a, ā
B	b	bē	b
C	c	kē	k
D	d	dē	d
E	e	ē	e, ē
F	f	ef	f
G	g	gē	g
H	h	hā	h
I (J)	i (j)	ī	i, ī, j
K	k	kā	k
L	l	el	l
M	m	em	m
N	n	en	n
O	o	ō	o, ō
P	p	pē	p
Q	q	kū	k (w)
R	r	er	r
S	s	es	s
T	t	tē	t
V (U)	v (u)	ū	u, ū, w
X	x	iks[1]	ks
Y	y	ȳ[ユー]	y, ȳ
Z	z	zēta	z

(註) 1. 英語でも古くは[iks]だった．[ef, el, em]等の影響で[eks]になったものと思われる．

§2. I(i)は[i, ī]のほかに[j](英語 yes の y の音)もあらわしていた．J(j)はのちにI(i)を変形して作られた字形である．本書では[j]をあらわすものとしてJ(j)を用いることにする．

V(v)は[u, ū]のほかに[w]もあらわしていた．U(u)はのちにV(v)を変形して作られた字形である．本書では[u]または[ū]の音をあらわすものとしてU(u)を用いることにする．

§3. 母音をあらわす文字は a, e, i, o, u, y の六字で，それぞれ長短いずれをもあらわす．そこで，長母音か短母音かは文字からは不明なわけで，学習の便宜上，長母音をあらわす場合には ā, ē, ī, ō, ū, ȳ のように上に横線を付して示す．この横線は普通の場合，用いられない．

§4. ae[アエ], au[アウ], ei[エイ], eu[エウ], oe[オエ], ui[ウイ]の六種の母音連続を複母音という．

§5. 母音の間の j は[jj]と発音される．例 major[マイヨル] より大きい，pejor[ペイヨル] より悪い

§6. [k]の音をあらわす文字に C(c)と K(k)の二つがあるが，後者はまれにしか用いられない．

§7. q は常に u の前で用いられ，qu で[kw]と発音される．§1で，q の発音を k(w)と示したのはそのためである．例 quoque[クウォクウェ] ……もまた，quattuor[クワットゥオル] 四(数詞)

§8. ph, th, ch, rh は，p, t, c[k], r に強い気息を伴わせて，プッ，トゥッ，クッ，ルッのように発音されたものであろうが，便宜的に p, t, c, r と同様に発音してもよいであろう．

§9. [練習問題1] 次の語を発音せよ(アクセント[英語のような強さのアクセント]はいずれも語頭にある)．

rosa ばら　　vīnum 葡萄酒　　aqua 水

diēs 日	pulcher 美しい	amō 愛する
Gracchus (姓名)	Catō (姓名)	Gāius (個人名)
Jūlius (氏族名)	Caesar (姓名)	Mārcus (個人名)
Tullius (氏族名)	Cicerō (姓名)	cujus 誰の
ūnum 一	decem 十	centum 百
mille 千	Rhēnus ライン川	

ロサ	ウィーヌム	アクワ
ディエース	プルケル	アモー
グラックス	カトー	ガーイウス
ユーリウス	カエサル	マールクス
トゥッリウス[1]	キケロー[2]	クイユス
ウーヌム	デケム	ケントゥム
ミーッレ[1]	レーヌス	

(註) 1. ll, rr など同一子音が重なる場合も，[ll][rr]のように，それぞれの子音を発音する．2. [スィセロー]と読むのは英語訛，[ツィツェロー]と読むのはドイツ語訛である．

II　音節とアクセント

§10.　単語は，そこに含まれている母音または複母音(cf. §4)の数だけの音節を有するという．例　difficilis[ディッフィキリス　四つの音節を有する]　むずかしい，Caesar[2音節．aeは複母音なので2ではなく1と数える]，Jūlius[3音節．iuは複母音ではない]

§11.　音節が長母音(cf. §3)または複母音を含む場合，その音節は本来的に長い(long by nature)音節であるという．例　Rōmānī[ローマーニー](ーーー)　ローマ人，audāx[アウダークス](ーー)　大胆な

§12.　音節に含まれる母音が短い場合でも，その母音がふたつ以上の子音の前に位置している場合には，その音節は位置によって長い(long by position)という．例　posse(ー◡)　できること

なお位置によって長い音節における母音そのものが長く発音されるのではないので注意．ふたつ以上の子音の前に位置している場合には，直後の子音の発音に要する時間も加えて，長いとされるのであろう．

§13.　単語の最後の音節をラテン語の術語でultima(最後)，最後より二番目および三番目を，それぞれpaenultima(ほとんど最後)，antepaenultima(paenultimaの前)という．例えばRōmānīにおいて，nīがultima，māがpaenultima，Rōがantepaenultimaである．

§14.　二音節からなる単語ではpaenultimaにアクセントがある．

例　vīta[ウィータ　以下，アクセントのある個所を下線で示す]　生命，cito[キト]　速く

§15.　三音節以上の単語では，paenultimaが本来的に長い場合(cf. §11)，および位置によって長い場合(cf. §12)にはpaenultimaに，短い場合にはantepaenultimaにある．

例　fortūna[フォルトゥーナ]　幸運，jūcundus[ユークンドゥス]　喜ばしい，litterae[リッテラエ]　手紙

§16.　一音節の単語は，もちろんその音節にアクセントがある．

例　pēs[ペース]　足，ōs[オース]　口

なお，et(そして)，sed(しかし)等のような付属的な語は，普通，前後の語といっしょに発音されて，アクセントを有しない．

例　pēs et ōs[ペース エトゥ オース]　足と口

§17.　[練習問題2]　アクセントに注意して次の語を発音せよ．

puella　少女	Cornēlia（女性の名）	salūber　健康的な
beātitūdō　幸福	juvenis　若い	fēmina　女性
ēleganter　優雅に	aeternus　永遠の	Rōmulus（個人名）
Coriolānus（姓名）	Scīpiō（姓名）	Vergilius（氏族名）
Horātius（氏族名）	Juvenālis（姓名）	Sāturnālia（祭の名）
spectāculum　見せ物	auxilium　援助	pecūnia　お金
senectūs　老年	moneō　警告する	

プエッラ	コルネーリア	サルーベル
ベアーティトゥードー	ユウェニス	フェーミナ
エーレガンテル	アエテルヌス	ロームルス
コリオラーヌス	スキーピオー	ウェルギリウス
ホラーティウス	ユウェナーリス	サートゥルナーリア
スペクタークルム	アウクスィリウム	ペクーニア
セネクトゥース	モネオー	

III　動詞活用　現在直説法能動相 第一，第二活用

§18.　動詞は活用して相(voice)，法(mood)，時称(tense)，数(number)，および人称(person)を区別する．

§19.　相には能動相(active)と受動相(passive)の二つがある．

§20.　法には直説法(indicative)，接続法(subjunctive)および命令法(imperative)の三つがある．

§21.　時称には現在(present)，未完了過去(imperfect)，未来(future)，完了(perfect)，過去完了(pluperfect)，未来完了(future perfect)の六つがある．

§22.　数には単数，複数の二つがある．

§23.　人称には一人称，二人称，三人称の三つがある．

§24.　なお，ほかに動詞に付属して不定詞(infinitive)，分詞(participle)，動名詞(gerund)，動形容詞(gerundive)，目的分詞(supine)がある．

§25.　現在直説法能動相(第一，第二活用)

		amō　愛する	moneō　警告する
単	1	amō	moneō
	2	amās	monēs
	3	amat	monet
複	1	amāmus	monēmus
	2	amātis	monētis
	3	amant	monent

§26.　amā-, monē- の部分を現在幹(present stem)という．一人称単数(第一活用)では幹末の母音 ā が人称語尾 -ō の中に呑み込まれている．第二活用では幹末の母音が短くなっている．また第一，第二活用とも三人称の単数と複数においても，人称語尾 -t, -nt の前で幹末の母音が短くなっている．

§27.　人称と数が活用によって示されているので，代名詞の主語を置くということは，主語を強調する時以外にはない．

§28.　現在は「……している」の意味もあらわしうる．「……する」か，「……している」かは文脈で判断することになる．

§29.

dum　(……する)間
nōn　ない
peccō　罪を犯す
spērō　希望する
spīrō　息をする
videō　見る，見える(見る能力がある)

§30.　練習問題 3

1. Peccās.　2. Nōn peccō.　3. Vidēs?　4. Videō.　5. Dum spīrō, spērō.(アメリカ南カロライナ州の標語)

§31.　練習問題 4

1. あなたたちは罪を犯している．2. 我々は罪を犯していない．3. あなたたちは見えているのか．4. 私たちは見えている．5. 息のある限り(dum)，我々は希望を持ちつづける．

IV　名詞活用　第一活用

§32.　名詞は活用して数(number)と格(case)を区別し，性(gender)を有する．

§33.　性には男性(masculine)，女性(feminine)，中性(neuter)の三つがある．

§34.　数には単数と複数の二つがある．

§35.　格には主格(nominative)，呼格(vocative)，属格(genitive)，与格(dative)，対格(accusative)，奪格(ablative)がある．

§36.　第一活用

puella　少女

単	主・呼	puella	複	主・呼	puellae
	属	puellae		属	puellārum
	与	puellae		与	puellīs
	対	puellam		対	puellās
	奪	puellā		奪	puellīs

§37.　第一活用の大部分は女性である．少数が男性である．以下それぞれを *f.* と *m.* の略号で示す．女性とか男性であるということの意味は後に説明される(cf. §62)．

§38.　活用の型を示すために単数主格形に加えて，単数属格形の語尾を添えて示すのが習慣である．例　puella, ae

§39.　格の用法の詳細は少しずつ学ぶことになるが，その大略は次の通りである．

主格	puella	少女が(は)
呼格	puella	少女よ

属格	puellae	少女の
与格	puellae	少女に
対格	puellam	少女を
奪格	puellā	少女から

§40.

ambulō　歩く	laudō　ほめる
cum　……といっしょに[奪格支配]	rīdeō　笑う
dōnō　与える，捧げる	rosa, ae, *f.*　ばら
fōrma, ae, *f.*　姿	stō　立つ

§41.　練習問題5

1. Puella[1] stat et rīdet. 2. Puellam amō[2]. 3. Puellae[3] rosam dōnō. 4. Fōrmam puellae laudō. 5. Cum puellā ambulō.

(註)　1. ラテン語には定冠詞も不定冠詞もない．「(その)……」か「(或る)……」かは文脈で判断することになる．2. 動詞が文末に来るのが普通の語順とされている．3. 間接目的語は直接目的語の前に来るのが普通の語順とされている．

§42.　練習問題6

1. 少女たちが立って笑っている．2. 少女たちを彼らは愛している．3. 少女たちにばら[複数]を彼らは贈る．4. 少女たちの姿[単数も使える．ひとまとめにして言う感じになる]を彼らはほめる．5. 少女たちといっしょに彼らは歩く．

V　動詞　第三，第四，第五活用

§ 43.　現在直説法能動相(第三，第四，第五活用)

	emō　買う	audiō　聞く	capiō　取る
単 1	emō	audiō	capiō
2	emis	audīs	capis
3	emit	audit	capit
複 1	emimus	audīmus	capimus
2	emitis	audītis	capitis
3	emunt	audiunt	capiunt

§ 44.　第三活用の現在幹は，幹末の母音が単数一人称語尾 -ō の中に呑み込まれている．複数三人称では u，その他では i になっている．

§ 45.　第四活用の複数三人称語尾の前が i ではなく，iu である点に注意．

§ 46.　第五活用は単数一人称，複数三人称では第四活用に等しく，単数二人称，複数一，二人称では第三活用に等しい．単数三人称では第三，第四活用の双方に等しい．

§ 47.

bene　善く
discō[第三活用]　学ぶ
diū　長く
et　そして
neque... neque...　……も……もない
nesciō[第四活用]　知らないでいる(nōn sciō とは普通言わない)
sapientia, ae, *f*.　知恵
sciō[第四活用]　知っている
sed　しかし
vīvō[第三活用]　生きる

§ 48.　練習問題 7

1. Scīs?　2. Nesciō.　3. Nōn bene vīvis.　4. Diū vīvis sed sapientiam nōn discis.　5. Neque vidēs neque audīs.

§ 49.　練習問題 8

1. あなたがたは知っているか．2. 我々は知らない．3. あなたがたは善く生きていない．4. 彼らは長く生きていて，知恵を学んでいる．5. あなたがたは見ることも聞くこともしない．

§ 50.　[引用句 1]

Plūs quam dīmidium tōtīus est prīncipium.(アリストテレス『ニコマコス倫理学』1098b7)

始めというものは全体の半分以上にも当る．

(解説)　1. plūs「より多くのもの」．2. quam「……よりも」．3. dīmidium「半分」．4. tōtīus「全体の」．5. est「……である」．6. prīncipium「始め」．

VI　名詞　第二活用(1)

§51. 第二活用

		dominus　主人	verbum　言葉
単	主	dominus	verbum
	属	dominī	verbī
	与	dominō	verbō
	対	dominum	verbum
	奪	dominō	verbō
	呼	domine	verbum
複	主・呼	dominī	verba
	属	dominōrum	verbōrum
	与	dominīs	verbīs
	対	dominōs	verba
	奪	dominīs	verbīs

§52. 第二活用に属する名詞のうち，単数主格の語尾が us に終わる語の大部分は男性，少数が女性である．um に終わる語は中性(以下 *n.* の略号で示す)である．

§53. 第二活用に属する名詞で us に終わる語の単数に限り，特別の呼格形がある．例　domine　主よ．

§54. 中性名詞は，第二活用に限らず，後に説明されるすべての活用において主格と対格とが同形(単数においても複数においても)である．そして複数の主格・対格は常に a で終わる(ちなみに，第一活用の主格単数と混同しないよう注意を要する)．

§55.

bellum, ī, *n.*　戦争
est　である[単数三人称]
malum, ī, *n.*　悪
serviō[第四活用]　仕える，隷従する
servus, ī, *m.*　奴隷
sunt　である[複数三人称]
supplicium, ī, *n.*　刑罰，苦悩
vīta, ae, *f.*　人生，生命，生活
vocō[第一活用]　呼ぶ

§56. 練習問題 9

1. Dominus servōs vocat. 2. Servī dominō serviunt. 3. Servī verba dominī audiunt. 4. Vīta supplicium est[1].(セネカ『[ポリュビウス宛]慰め』9, 6) 5. Bellum est malum[2].

(註)　1. cf. §41(註 2). 2. malum が普通の語順でないことによって多少強調されていることになろう．

§57. 練習問題 10

1. 奴隷たちが主人を呼んでいる．2. 主人が奴隷に仕えている．3. 主人が奴隷たちの言葉を聞いている．4. 人生は空虚(vānitās)である．5. 戦争[複数]は悪である．

§58. [引用句 2]

In ūnāquāque rē maximum est prīmōrdium.(プラトン『国家』377 A)

何事であれ，始めがもっとも肝心である．

(解説)　1. in「……において」．2. ūnāquāque「それぞれどの……も」．3. rē「物事」．4. maximum「もっとも大きい」．5. prīmōrdium, ī, *n.*「発端」．

VII　形容詞活用　第一，第二活用(1)

§ 59.　第一，第二活用(1)

bonus　よい

	男性	女性	中性
単 主	bonus	bona	bonum
属	bonī	bonae	bonī
与	bonō	bonae	bonō
対	bonum	bonam	bonum
奪	bonō	bonā	bonō
呼	bone	bona	bonum
複 主・呼	bonī	bonae	bona
属	bonōrum	bonārum	bonōrum
与	bonīs	bonīs	bonīs
対	bonōs	bonās	bona
奪	bonīs	bonīs	bonīs

§ 60.　形容詞は数と格のみならず，(名詞と異なり)性に従っても活用する．

§ 61.　形容詞第一，第二活用は，女性形は名詞の第一活用に，男性形と中性形は名詞の第二活用に準じて活用する．

§ 62.　形容詞が名詞を形容する場合，名詞の性・数・格に一致しなければならない．

例　dominum bonum　よい主人を，fēminārum bonārum　よい女たちの

しかし，このことは，活用語尾の形が同じであるという意味ではないので注意．形が異なる場合もあるわけである．

例　agricola(*m.*) bonus　よい農夫，pōpulōrum(*f.*) bonārum　よいポプラの木の

§ 63.　dominus bonus が「よい主人」を意味する場合，形容詞は属性的に用いられているという．dominus bonus は「(その)主人はよい」を意味する場合もある[1]．その場合は述語的に用いられているという．どちらかは文脈によって判断することになる．

(註)　1. 短文，格言等では est あるいは sunt がしばしば省略される．

§ 64.　属性的に用いられる場合，名詞の後に置かれるのが普通の語順で，前に置くと形容詞が多少強調されることになる．

例　populus Rōmānus　ローマの国民，vēra amīcitia　真実の友情

§ 65.　形容詞はそのままで名詞としても普通に用いられる．この点，注意を要する．

例　bonī　よい男たち(人々)
　　bonum　よきもの，善
　　bona[中性複数]　財産

§ 66.

ad　……へ，……の方へ[対格支配]
cārus, a, um　親しい，愛する
cicāda, ae, *f.*　蟬
contemnō[第三活用]　軽蔑する
culpō[第一活用]　とがめる
epistula, ae, *f.*　手紙
formīca, ae, *f.*　蟻
longus, a, um　長い
malus, a, um　悪い
mittō[第三活用]　送る
multus, a, um　多くの
puer, erī, *m.*(cf. §§ 79, 80)　少年

§ 67.　練習問題 11

1. Dominus laudat bonōs servōs[1], culpat malōs. 2. Servī laudant bonum dominum[1], malum contemnunt. 3. Puer epistulam longam ad cāram puellam mittit. 4. Puer cārae puellae rosās dōnat. 5. Cicāda cicādae cāra[1], formīca formīcae[2].

(註)　1. 対比等の効果を出すために接続詞 et 等が省略されることがよくある．2.

cicāda と formīca を (cicād)a と (for)mīca に切ってつなげると，この文の意味が示唆する語 amīca「(女)友達」になるということば遊びにもなっている．

§ 68. 練習問題 12

1. 主人はよい奴隷[単数]をほめ，悪い奴隷[単数]をとがめる．2. 奴隷[複数]はよい主人[複数]をほめ，悪い主人[複数]を軽蔑する．3. 少女は，好きな男の子に沢山の(multus, a, um)手紙を送る．4. 男の子たち(puerī)は好きな少女たちにばらを贈る．5. 蟬は蟬と，蟻は蟻と仲がよい[蟬も蟻も複数で]．

§ 69. [引用句 3]

Graecī sapientiam quaerunt. (『コリント前書』1, 22)

ギリシャ人は知恵を求める．

(解説) 1. Graecus, a, um「ギリシャの」(cf. § 65)．2. quaerō[第三活用]「捜し求める，探求する」．

VIII 未完了過去直説法能動相

§ 70. 未完了過去

		amō	moneō	emō
		1.	2.	3.
単	1	amābam	monēbam	emēbam
	2	amābās	monēbās	emēbās
	3	amābat	monēbat	emēbat
複	1	amābāmus	monēbāmus	emēbāmus
	2	amābātis	monēbātis	emēbātis
	3	amābant	monēbant	emēbant

		audiō	capiō
		4.	5.
単	1	audiēbam	capiēbam
	2	audiēbās	capiēbās
	3	audiēbat	capiēbat
複	1	audiēbāmus	capiēbāmus
	2	audiēbātis	capiēbātis
	3	audiēbant	capiēbant

§ 71. 第一，第二活用単数一人称は現在幹に -bam を付して作る．第三，第四，第五活用は単数一人称末尾 -bam の前がそれぞれ ē, iē, iē となる．

§ 72. 他の人称形は単数一人称末尾 -am の部分を第一活用現在のように活用させれば得られる．

§ 73. 未完了過去は「……していた」「……せんとしていた」のごとく，過去における継続，反復・習慣，開始の意を表わす．

§ 74.

clāmō[第一活用]　叫ぶ
contrā　……に対抗して[対格支配]
cottīdiē　毎日
injūria, ae, *f*.　不正，不法
resistō[第三活用]　抵抗する
taceō[第二活用]　黙る

§ 75.　練習問題 13

1. Injūriam vidēbās sed tacēbās. 2. Tacēbant sed clāmābant. 3. Audiēbant sed tacēbant. 4. Resistēbam contrā injūriam. 5. Ad puellam rosam cottīdiē mittēbam.

§ 76.　練習問題 14

1. 彼らは不法を見ていたが，しかし黙っていた．2. 我々は黙っていた，しかし叫んでいたのだ．3. 私は聞いていた，しかし黙っていた．4. 我々は不正に対して抵抗していた．5. 少女にばらを彼は毎日送っていた．

IX　名詞　第二活用(2)

§ 77.　第二活用の -ius に終わる語の単数呼格は -ie ではなくて，-ī である(cf. § 53)．例　fīlī(fīlius)　息子よ

また paenultima が短くても，アクセントは paenultima にある(cf. § 15)．

例　Vergilī[ウェルギリー](cf. Vergilius[ウェルギリウス])

§ 78.　第二活用の -ius, -ium に終わる語の単数属格は -iī のほかに -ī もある．後者の方が普通の形である．

また後者の場合 paenultima が短くても，アクセントは paenultima にある．

例　Vergilī[ウェルギリー](cf. Vergiliī[ウェルギリイー])，ingenī[インゲニー](cf. ingeniī[インゲニイー])　才能

§ 79.　puer　少年，ager　耕地

単	主•呼	puer	ager	複 主•呼	puerī	agrī
	属	puerī	agrī	属	puerōrum	agrōrum
	与	puerō	agrō	与	puerīs	agrīs
	対	puerum	agrum	対	puerōs	agrōs
	奪	puerō	agrō	奪	puerīs	agrīs

§ 80.　puer のように単数主格および呼格末尾(-us と -e)が，r の後ろで消失しているものがある．

§ 81.　ager のように単数主格および呼格末尾(-us と -e)が，r の後ろで消失し，かつ r の前に e を発生させているものがある．

-er で終わる第二活用の語は，e が元来のものか，単数主・呼格だけにあらたに発生したものかは，単数主格形だけからはわからない．socer, erī「しゅうと」，ager, agrī のように併記された単数属格形から判別することになる．

§ 82.

discipulus, ī, *m*. 生徒	liber, brī, *m*. 本
doceō[第二活用] 教える	magister, trī, *m*. 教師
errō[第一活用] 誤る	nunc 今
legō[第三活用] 読む	

§ 83. 練習問題 15

1. Magister discipulōs docēbat. 2. Discipulī verba magistrī audiēbant. 3. Discipulī librōs legēbant. 4. Errābās, puer[1], sed nunc nōn errās. 5. Errās, fīlī[1].

(註) 1. 呼格は文頭より第二番目以降の位置に来るのが普通とされている.

§ 84. 練習問題 16

1. 教師たちが生徒らを教えていた. 2. 生徒たちが教師たちの言葉を聞いていた. 3. 少年が本[単数]を読んでいる. 4. 少年[複数]よ, 君たちは誤っていた, しかし今は誤っていない. 5. 息子よ, おまえは誤っていた.

X 形容詞 第一, 第二活用(2)

§ 85. līber 自由な

		男性	女性	中性
単	主・呼	līber	lībera	līberum
	属	līberī	līberae	līberī
	与	līberō	līberae	līberō
	対	līberum	līberam	līberum
	奪	līberō	līberā	līberō
複	主・呼	līberī	līberae	lībera
	属	līberōrum	līberārum	līberōrum
	与	līberīs	līberīs	līberīs
	対	līberōs	līberās	lībera
	奪	līberīs	līberīs	līberīs

§ 86. līber のように男性単数主・呼格の末尾(-us と -e)が, r の後ろで消失しているものがある(cf. § 80).

§ 87. niger 黒い

		男性	女性	中性
単	主・呼	niger	nigra	nigrum
	属	nigrī	nigrae	nigrī
	与	nigrō	nigrae	nigrō
	対	nigrum	nigram	nigrum
	奪	nigrō	nigrā	nigrō
複	主・呼	nigrī	nigrae	nigra

属	nigrōrum	nigrārum	nigrōrum
与	nigrīs	nigrīs	nigrīs
対	nigrōs	nigrās	nigra
奪	nigrīs	nigrīs	nigrīs

§ 88.　niger のように男性主・呼格の末尾(-us と -e)が r の後ろで消失し，かつ r の前に e を発生させているものがある(cf. § 81).

līber と niger の上述の相違は，līber, era, erum ; niger, gra, grum のように併記された女性，中性の単数主格から判別していくことになる.

§ 89.

aeger, gra, grum　病気の	porta, ae, *f*.　門
exspectō[第一活用]　待つ	prope　……の近くで[対格支配]
impiger, gra, grum　勤勉な	pulcher, chra, chrum　美しい
miser, era, erum　哀れな	saepe　しばしば
piger, gra, grum　怠慢な	vīsitō[第一活用]　訪ねる[対格支配]

§ 90.　練習問題 17

1. Servus niger dominum prope portam exspectat. 2. Dominus servum nigrum laudat. 3. Dominus pigrōs servōs culpat. 4. Pulcher puer amābat puellam pulchram. 5. Pulchra puella saepe vīsitat puerum aegrum et miserum.

§ 91.　練習問題 18

1. 主人が色の黒い奴隷を門の近くで待っている. 2. 色の黒い奴隷たちが主人をほめる. 3. 勤勉な奴隷たちを主人がほめていた. 4. 美しい少女たちが美しい少年[単数]を愛していた. 5. 美しい少年がしばしば病気の少女を訪ねていた.

§ 92.　[引用句 4]

Beātī pācificī. (『マタイ伝』5, 9)

幸いなるかな，平和をつくり出す者たちは.

(解説)　1. beātus, a, um「幸いな」(beātī が述語的に用いられている. 主語と述語の語順が入れ替わっているところから，どちらも多少強調されていることになろう). 2. pācificus, a, um「平和をつくり出す」(cf. § 65).

XI　未来直説法能動相

§93. 未来

		amō	moneō	emō	audiō	capiō
		1.	2.	3.	4.	5.
単	1	amābō	monēbō	emam	audiam	capiam
	2	amābis	monēbis	emēs	audiēs	capiēs
	3	amābit	monēbit	emet	audiet	capiet
複	1	amābimus	monēbimus	emēmus	audiēmus	capiēmus
	2	amābitis	monēbitis	emētis	audiētis	capiētis
	3	amābunt	monēbunt	ement	audient	capient

§94. 第一，第二活用単数一人称は現在幹(cf. §26)に bō を付してつくる．他の人称形は，単数一人称末尾の -ō の部分を第三活用現在のように活用させれば得られる．

§95. 第三，第四，第五活用単数一人称は am で終わる．現在幹末の母音は，第三活用では am の中に呑み込まれている．第四，第五活用では i となっている．

§96. 他の人称形は，単数一人称末尾の -am の部分を第二活用現在のように活用させれば得られる．したがって第二活用現在と第三活用未来を混同しないよう注意を要する．例　monet[第二活用現在．未来は monēbit]：emet[第三活用未来．現在は emit]

§97. 未来は「……しているだろう」のように，動作の継続を意味することもできる．また「……しよう」(一人称の場合)の意味もあらわしうる．そのいずれかは文脈で判別することになる．

§98.

etsī　たとえ……としても	pecūnia, ae, *f*.　お金
mox　まもなく	sī　もし……なら

§99. 練習問題 19

1. Tacent sed mox clāmābunt. 2. Sī injūriam vidēbunt, nōn tacēbunt. 3. Resistent contrā injūriam. 4. Pecūniam nōn capient. 5. Etsī monēbimus, nōn audient.

§100. 練習問題 20

1. あなたは黙っているが，じきに叫ぶだろう．2. 我々はたとえ不正を見ても(etsī)沈黙しているだろう．3. 我々は不正に対して抵抗しないだろう．4. 金を我々は受け取る(capiō)だろう．5. あなたが警告しても，我々は聞かないだろう．

§101. [引用句 5]

Cultūra animī philosophia est. (キケロ『トゥスクルム談義』2, 13)

心をたがやす――これが哲学をするということである．

(解説)　1. cultūra, ae, *f*.「耕作，訓練，改善」(culture の語源)．2. animus, ī, *m*.「心，魂」(属格 animī が「たがやす」という行為の目的語のような働きをしている．このような属格を目的語的な属格という)．3. philosophia, ae, *f*.「哲学」(ギリシャ語で「愛知」の意)．

XII　前置詞．所格．eō

§ 102. 前置詞は名詞，代名詞の対格形あるいは奪格形と用いられる．大部分の前置詞はどちらか一方とだけ用いられるが，若干のものはどちらとも用いられる．どちらとも用いられる前置詞は，格形の異なるに従って，意味も多少異なってくる．

§ 103. 対格および奪格と用いられるものの例．

	対格	奪格
in	……の中へ	……の中で，……において ……の上で

§ 104. 対格と用いられるものの例．

ad　……の方へ

§ 105. 奪格と用いられるものの例．

ab(ā)[1]	……から
ex(ē)[2]	……の中から

(註)　1. ab は母音と h の前で用いられる．また，p, b, f, v 以外の子音の前で用いられることもある．ā は p, b, f, v の前で用いられる．h 以外の子音の前で用いられることもある．2. ex は母音の前でも子音の前でも用いられる．ē は子音の前で用いられることがある．

§ 106. 上に示した in, ad, ab(ā), ex(ē) の意味は代表的なものであって，ほかにもさまざまな意味を表わす．他の前置詞についても同様であり，個々に学んでいくことになる．

§ 107. eō「行く」の現在直説法

単	1	eō	複	1	īmus
	2	īs		2	ītis
	3	it		3	eunt

§ 108. 現在幹 ī- が，人称語尾 -ō, -nt の前で e-, eu- となっている点，不規則で注意を要する．ちなみに未完了過去(単数一人称)は ībam，未来(単数一人称)は ībō である．

§ 109.

(1)	Quō īs?	どこへ行くのか．
	Rōmam (Lesbum).	ローマへ(レスボス島へ)
(2)	Unde vēnistī[1]?	どこから来たのか．
	Rōmā (Lesbō).	ローマから(レスボス島から)

(註)　1. veniō の完了単数二人称(cf. §§ 144, 145).

§ 110. 町と小島の名称は対格，奪格だけで「……へ」「……から」を意味し，in, ad, ab(ā), ex(ē) を用いない．

§ 111.

Ubi habitās?	どこに住んでいるのか．
Rōmae (Lesbī, Athēnīs).	ローマに(レスボス島に，アテーナイに)

§ 112. 町と小島の名称には所格(locative)という特別の格形があって，「……において」を意味する場合これを用いる．

所格は，第一，第二活用の単数形の場合は，それぞれの属格形と同形である(Rōmae, Lesbī)．複数形の場合は，奪格形と同形である(Athēnīs)．

§ 113.

Athēnae, ārum, *f. pl.*　アテーナイ
dūcō[第三活用]　(道が)通じている
lūdō[第三活用]　遊ぶ
oppidum, ī, *n.*　城市，町
per　……を通って[対格支配]
quō　どこへ
silva, ae, *f.*　森
sub　……の下へ[対格支配]，……の下で[奪格支配]
terra, ae, *f.*　土地，地面
ubi　どこで
vādō[第三活用]　行く(特に，急いで，あるいは目的をもって)
via, ae, *f.*　道

§ 114. 練習問題 21

1. Puerī in viā cum puellīs lūdēbant. 2. Longa via dūcit per oppidum in silvam. 3. Quō vādis, Domine? Rōmam. (cf.『ヨハネ伝』16, 5) 4. Ubi habitābant? Rōmae sed nunc Athēnīs. 5. Sub terrā diū habitant cicādae.

§ 115. 練習問題 22

1. 少年[単数]が道で少女[単数]と遊んでいる．2. 多くの(multus)道が町々を通って森の中に通じている．3. どこへ彼らはいくのか．ローマからタレントゥム(Tarentum, ī, *n.*)を通ってブルンディシウム(Brundisium, ī, *n.*)へ．4. どこにあなたは住んでいるのか．タレントゥムに．5. 蟻(formīca)も(quoque cf. id quoque「それも」)地下に住んでいる．

XIII 不定詞(現在能動相). sum, possum

§ 116. 不定詞(現在能動相)

amō	moneō	emō	audiō	capiō
1.	2.	3.	4.	5.
amāre	monēre	emere	audīre	capere

不定詞(現在能動相)は現在幹に re を添えた形である．なお，第三，第五活用では幹末の母音が e になっている点に注意．

活用の型を示すために現在直説法単数一人称形に加えて，不定詞の語尾を添えて示すのが習慣である．例 amō, āre (cf. emō, ere)

§ 117. sum「である，がある」，possum「できる」の現在直説法

		sum	possum
単	1	sum	possum
	2	es	potes
	3	est	potest
複	1	sumus	possumus
	2	estis	potestis
	3	sunt	possunt

§ 118. sum の活用は語幹に su と es が混在する等，不規則である．possum の pos- が母音の前で pot- となっている点に注意．pot- が元来の形で，pos- は，pot- が s の前でこれに同化して，pos- となったものである．

§ 119. sum の不定詞(現在)は esse で，現在幹 es に se を添えた形である．この se が元来の不定詞の語尾で，第一～第五活用動詞の不定詞語尾 re は，se の s が母音間で r に変化したものである．

possum の不定詞(現在)は posse である(potesse でない点に注意)．

§ 120. sum および possum の未完了過去単数一人称は，それぞれ eram, poteram である．eram の r は現在幹 es の s が母音間で r に変化したもの．他の人称形は -am の部分を第一活用現在のように活用させれば得られる(cf. § 72)．

§ 121. sum および possum の未来単数一人称はそれぞれ erō, poterō である．他の人称形は -ō の部分を第三活用現在のように活用させれば得られる(cf. § 94)．

§ 122.

beātus, a, um　幸福な	lūdus, ī, *m*.　学校
crās　明日	maneō, ēre　留まる
dēbeō, ēre　……ねばならない	nōndum　まだ……ない
domī　家に	quod　……(なの)だから
hodiē　今日	sānus, a, um　健康な
jūstus, a, um　正しい	valeō, ēre　健康である

§ 123. 練習問題 23

1. Nōndum potes ad lūdum īre[1], quod aeger[2] es. 2. Hodiē domī manēre dēbēs. 3. Crās poteris ad lūdum īre[1] sī valēbis. 4. Diū aeger erat, mox sānus erit. 5. Jūstī sī eritis, beātī eritis.

(註) 1. eō「行く」の不定詞．2. 主語の性別に注意．

§ 124. 練習問題 24

1. おまえたち[男性で，あるいはまた女性で]はまだ学校にいけないよ，病気なんだから．2. 今日はおまえたち，家にいなければいけないよ．3. 明日，身体の具合がよくなれば，おまえたち，学校に行けるだろう．4. 長い間私[女性]は病気でしたが，今は(nunc)健康です．5. もしあなた[女性]が正しければ，善く(bene)生きることができるだろう．

§ 125. [引用句 6]

In prīncipiō erat Verbum. (『ヨハネ伝』1, 1)

始めに，ことばはあった．

(解説) 1. prīncipium, ī, *n*.「始め」．in prīncipiō が文頭に置かれていて，この語句がそれだけ多少強調されていることになろう．2. Verbum と訳されている原語のギリシャ語(ロゴス)には「既知」を意味する定冠詞「ホ」が付いているので，藪から棒の感じもあるが，「既知」のニュアンスを助詞「は」で訳してみた．

ラテン語初歩 改訂版

1990年2月26日　第1刷発行
2002年3月20日　改訂版第1刷発行
2011年3月15日　改訂版第10刷発行

著者　田中利光（たなかとしみつ）

発行者　山口昭男

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・精興社　製本・松岳社

© Toshimitsu Tanaka 2002

ISBN 4-00-002419-1　　Printed in Japan

R〈日本複写権センター委託出版物〉本書を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上の例外を除き，禁じられています．本書をコピーされる場合は，事前に日本複写権センター(JRRC)の許諾を受けてください．
JRRC〈http://www.jrrc.or.jp　eメール：info@jrrc.or.jp　電話：03-3401-2382〉